師範學校

國文教科書

本科用

修正十六版

巻三

375.9
Yo19
資料室

42570
教科書文庫
4
810
51-1916
20003
02269

資料室
375.9
Y019

文部省檢定濟
大正五年一月十二日　師範學校國語科教科書

吉田彌平編

本科用

師範學校國文教科書

東京　光風館藏版

卷三

廣島大學圖書之印

廣島大學教育 26515 圖書

師範學校 **國文教科書** 本科用 卷三

目次

一 春の詩（口語文）……夏目漱石 一頁
二 修善寺便（候文）……尾崎紅葉 六
三 蔦の若葉（新體詩）……大和田建樹 二
四 武士道その一……山路愛山 一三
五 武士道その二……山路愛山 二〇
六 熊王の發心……隱士松翁 二六
七 盲啞の教育（口語文）……槇山榮次 三三

八 四時のあはれ……兼好法師 四〇
九 荒れたる御堂……兼好法師 四五
一〇 にんわじの ほつし（分別書方）……けんからほつし 四七
一一 これも……兼好法師 四八
一二 汽車に乘りて（新體詩）……上田敏 五一
一三 靜思と活動……三宅雪嶺 五六
一四 先進遺響……渡邊無邊 六一
一五 芳流閣上の奮鬪その一……瀧澤馬琴 六五
一六 芳流閣上の奮鬪その二……瀧澤馬琴 六九
一七 佐渡が島（口語文）……尾崎紅葉 七五

一八 唐錦（短歌）……八〇
一九 物の初……幸田露伴 八二
二〇 落花の雪……八八
二一 松の下露……九六
二二 はぎ（狂歌）……一〇五
二三 祖先崇拜（口語文）……芳賀矢一 一〇七
二四 乃木大將を祭る……一一八
二五 東鄕大將……尾崎行雄 一二五

師範學校 國文教科書 本科用 卷三目次 終

帝國大學圖書之印

師範學校 國文教科書 本科用 卷三

一 春の詩

夏目漱石

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて居るか、影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせと忙がしく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、居たゝまれない樣に氣をそゝる。かの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴き

くらさなければ、氣が濟まんと見える。その上何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂つて居るうちに、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裏に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛びあがつて來るのかと思つた。

春眠不覺曉

次には落ちる雲雀と揚る雲雀とが十文字にすれ違ふだらうと思つた。最後に、落ちる時も、揚る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたときに、魂のありかゞ判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれた

本能

ものゝうちで、あれほど元氣のあるものはない。あ
あ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩であ
る。
忽ちシェレー*の雲雀の詩を思ひだした。口のうち
で諳誦して見たが、覺えてゐる所は僅か二三句しか
なかつた。
前を見ては、後へを見ては、物欲しとあこがるゝか
な、われ。腹からの笑といへど、苦のそこにあるべ
し。うつくしききはみの歌に、悲しさのきはみの
想、籠るとを知れ。

*英國の詩人。一七九二—一八二二。

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひき
つて、一心不亂に、前後を忘卻して、わが喜を歌ふわけ
には行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩に
は、よく萬斛の愁などと云ふ句がある。して見ると、
詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經
が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜もあらうが、無量
の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考へ
ものだ。
しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つ
づけである。足の下に時々蒲公英を蹈みつける。

鋸の様な葉が遠慮なく四方へのして、まんなかに黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、蹈みつけたあとで、氣の毒なことをしたとふりむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかにすわつて居る。（草枕）

二　修善寺便

尾崎紅葉

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘擎して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。「時政爺の邪慳何ぞ今に執著して假さざることかくのごときや。」と見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍の顯榮にものぼりたまひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にやおはしけんと低回去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の、御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈

六佛の朽廢、亦決して懷古の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲(一)冠者の墳は未だ弔はず、直、鄰に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上、申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨(二)鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠か

(一) 源範頼。

(二) 桂川の川中に涌き出づ。

らず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に著物を脱ぎ放しなど、始終ピントを安を妨害致候爲、技師の難澀これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に機械を立て候處、崕下

なる「馬の湯」に上下する四足の往來ありて、屢これに道を讓るべく餘儀無くせらるゝため、倥偬の間に速寫機を拈りて立退き申候。

此の寫眞修行の前、人の需によりて少々麤筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短册を得候こそ風流この上なく、感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば味淋醬油の附燒に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆・草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。（草紅葉）

大和田建樹

三　蔦の若葉

削りなす巖三丈、
河岸に額の如く、
突出でて水をぞ覗く。
額より千筋・八千筋、
繰りおろす綠の絲に、
美しき玉ぞ貫きたる。
その玉は蔦の若葉、
その絲は蔦の若づる。
藥玉を神の作りて、
御空より下げたる絲か。

瓔珞を佛の垂れて、
雲井よりゆらがす玉か。
一筋を取りても見んと、
青柳の樹陰の蛙、
飛びつけど丈こそ足らね、
伸せども手こそ屆かね。
紅葉せん秋待遠き
この蔦、この岩。（野菊）

四　武士道その一

山路愛山

天平二年　孝謙天皇

生物の種類する場所にも、其の場所する食物にも限りあるが故に其の優勝のもの生存し敗のものの死滅する狀態すべて生存上に起る競爭

聖武天皇　前九年後三年

日本武尊

御啓ゆゑ

桓武帝

*稱德天皇。

神*護景雲三年、朝廷警衛のため、東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ。』といひて、君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種の生存競爭劇しく、戰爭なども多かりしゆゑ、自ら健氣なる風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず。人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道といふものもこの間に成長したり。

武士道とは如何なるものぞや。一定の釋義を下す

世の中に立て相當の地歩を占むるを他ちやめられずみは美はれざる程のさま他くに劣りてばかりからぬさま

北條時政

大原を記景親前伊藤祐親

人は信仰切るべからず

藤原良房の邸をうし三條殿一院仙洞御所

*吾妻鏡。

はむづかしきことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。

賴朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「*我が首、若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ斯くは取出し奉るものなり。」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の

殿上人、武將の身として、夢見・物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義「實にも。」とて參殿に及びたり。

宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も惑はず突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は「敕命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべきやう やある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。」と云ひて、

(一) 保元物語。
(二) 保元物語。
(三) 平治物語。

敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも、背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思切りしことを、たとひ拷問せられたればとて申すべきやうなし。」と云ふが如く、何事も思切つて惡びれぬを武士の魂とす。

次に、其の頃の武士道にて、宗と重んじたるは志の專一なることなり。」尤も、「大名は草の靡き。」と云ふ諺は

(一) 平家物語。
(二) 承久繪物語。

其の頃よりあり。強さうなる方に加擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論は、かく意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ、志を主人の家に盡すを以て、眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて、向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は、[*]源氏に二人の主とることなければ、宣旨なりとて、えこそ內裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らしゝものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏

[*] 平家物語。

の習は左樣に候。」と力みしものもり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、(一)主君若し辱しめられたらんにはえこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬りいらん。」と決心したるものもあり。平宗清は賴朝の恩人にて、賴朝より「關(二)東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれども、「平家零落の後、賴朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當實盛は、「吉(三)についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の身方となり

(一) 平家物語。
(二) 吾妻鏡。
(三) 平家物語。

て討死せん。」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。

五　武士道その二

山路愛山

斯く臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ち し時、「病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戰場に死なん。」とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば

眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も、合戰の場に罷出でて何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば賴朝が十四歲にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著き一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連れらるまじ、兄にも具すまじ、功名不覺

も紛れぬ様に、唯一人いかにも強からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明らかに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、賴朝時代に

ても中々嚴重にして、武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば平治の亂に源氏の士、藤原信賴を見限り、「此*の殿は、人に頬を打たれて、返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し。」と云ひしが如く、大將若し武士道の心得なければ、士卒つかず、侍若し名を惜まず卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢つひに上輕く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

*平治物語。

さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風

を移しゝより、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の强きのみにては、未だ天下を圖り難し。賴朝は北條・三浦・千葉・小山など云ふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯强きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。（愛山文集）

六　熊王の發心

隱士松翁

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々謀られけるを、くちをしく思ひこめて過したりけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我がために親の敵にて候へば、いかにもして討ち侍らん。河内へ越えて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心を許し申さぬことのあるべき。たとひ心を許すことのあらずとも、七年八年ほども仕へ候はゞ、

（正平七年。）

そのうちには討ちぬべき便の、爭でなからん。御暇をこそ賜はらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、「幼ければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は命に代りて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ。」と、强ひて止めたまひけれども、「少し大人しくなりなば、よも近づけたまはじ。をさなくありなんとき參りてこそ。」としきりに望みければ、力及びたまはで、常に身を放ちたまはざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、阿倍野まで人數多添へてやらせけるに、それよりは我に等しき童一人を具し

て、赤阪の城に行きてそのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらん。」と尋ねられて、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひける者の小子に熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去にし時住吉の戰に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へば、せんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひて樣々

勞りて、後に正儀に、ありつる事を語りて、「をさなくは候へど、心のさかくしくて。」など申すに、あはれがりたまひて召寄せたまへり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思附きて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五ほどになりければ、「河内の國にて少しなる處を取らせん。」といひけれども、「いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七周に當りけるに思ひつけて、「今宵、正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め

奉らん。」と思ひたちてありけるに、その日御前に召して、「今日は吉日にてあるなれば元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせたる鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。　夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出でて、「討ち奉らんならば、今宵こそ。」と思ひて、膝をおしなほして正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思續けて、「いかで情なく討ち奉らん。」と思ひかへして心を鎮むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。」と思定めけれども、何心もなくわたらせたまふ有様を見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣縁に出でて聲をあげて泣き號ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひたまうて、障子を開きみたまへるに、伏沈めるさまのたゞには見えずありければ、「いかに。」と問はせたまひければ、ありつる心のうちをまをして、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なんより外は候はず。」とて刀を取直せば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、「いかでさはあらん。」と、とりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて

髻おしきり、往生院にて形をかへ、君より賜はせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。寺の傍に草の庵を結びて、「もしも心のかはることのありもやせん。」とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有樣をくはしく書添へて返しけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。（吉野拾遺）

*河内國南河内郡池島村にあり。

七　盲唖の教育

槇山榮次

「十九世紀に於て、大いに驚嘆すべきものはナポレオンとヘレン、ケルラー女史である。」とは(一)マーク、トウェインの揚言した所である。(二)實にケルラー女史の、唖者で、聾者で、盲者で、然も高等の教育を受け得たのは天下の偉觀である。しかしながらケルラーは完全なる學校で十分なる指導の下に良好なる教育を受け、それで以て目明きの學者にも匹敵すべきえらい者となつたのである。之に反し、我が塙撿校保己一は、

ヘレン、ケルラー及び筆蹟

(一)米國の人。一八八〇―。
(二)米國の文學者。一八三五―。

不幸の境遇に人となり、雨富撿挍の懇切なる指導を受けたとは云ひながら、普通の人の教育に就いてすら何等の研究も無かつた當時のことであるから、盲者の教育に對しては勿論何等の方法もなかつた、その時に於て殆ど全く自家の努力卽ち自己教育によつてあれほどの大家になつたのである。卽ち目明きの學者に匹敵すると云ふ程度を跳び越して、目明きの學者を指導すべき大學者となつたのである。又啻に一世の思想を支配すべき學者となつたばかりではなく、永く後世に傳へらるべき大家となつた

のである。盲啞聾の三つを兼ねながら、あれ程に發達したケルラー女史を驚嘆すると同樣に、五歲の時より全く明を失つて幾多の艱難困苦に堪へながら、あれほどの大家になつた撿挍の生涯にも亦驚嘆せざるを得ない。マーク、トウェインをして塙撿挍の傳記を知らしめたならば、ナポレオンやケルラーと同樣に、十九世紀に於ける驚嘆すべきものゝ一として、撿挍をも擧げたであらうと思はれる。ケルラーの事蹟は盲啞教育法のどれほどまで效果を收め得るといふことを示して居る、塙撿挍の生涯は自己教

育のどれほどまで成績を擧げ得るかといふことを語つて居る。

盲目の撿挍をしてあのとほりのえらい大家とならしめたのは其の耳であらうか。換言すれば其の聽覺が非常なためであらうか。傳記の示す所によれば、撿挍の耳は非常に勝れてゐたと稱することは出來ない。三年間音曲を習つたけれどもすこしも進歩しない、調子さへ合すことが出來なかつたと云ふてはないか。是には勿論撿挍の志が音曲に冷淡であつたと云ふことも原因したであらうが、生來の耳

が音樂的に出來て居ないといふことも確かに其の原因をなして居る。然るに此の無器用なる耳を知識の入り口として、あのやうなえらい學者となつたのは實に注目すべき點である。覺官は知識の門であるから、其の大切であることは固より言ふまでもないことであるが、しかし今の教

一己保塙

育は此の覺官に對して門番以上の價値を付して居るのではあるまいか。若しさうであるとすれば、塙撿校の傳記の如きは左樣な考に對して一の警戒となるであらうと思ふ。

盲啞教育の必要なことは今更言はずともことであるが、今日の有樣では猶微々たるものであると云はねばならぬ。是には種々の原因もあらうが、世人が盲啞教育を以て單に盲啞者に對する慈善的の事業に過ぎないと見做して居ることも、其の一因となつて居るだらうと思ふ。盲啞教育が決してそれだけの意味のものでないと云ふことは、塙撿校の事蹟が之を明示して居る、ケルラー女史の生涯が之を證明して居る。盲者・啞者の中にも斯樣な人物があるとすれば、其の天才發揚の機會を與へないで、空しく癈人として社會の底の方に埋沒せしめるのは、社會・國家のためではあるまい。よし撿校やケルラーのやうなえらい者が容易に出ないにせよ、兎も角も盲啞の中から社會の役に立つ人間を作り出し得ることは明らかなる事實である。盲啞教育は世の不幸者に對する慈善的の事業であるのみならず、社會・國

家のために有用なる人物を作り出し得る教育であるといふことを忘れてはならぬ。（塙撿校詳傳）

八　四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮き立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なき樣したる、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ世のあはれも人のこひしさもまされ。「人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど心細からぬかは。六月の

*春はたゞ花のひとへにさくばかりものゝあはれは秋ぞまされる。

さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。

賀茂の葵祭。四月の中の酉の日。

頃あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、鴈鳴きて來る頃、萩の下葉色づく頃、早稲田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝ業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。

*おぼしき事いはぬはげにぞはらふくるゝこゝちしける。

さて、冬枯の景色こそ秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。「年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもとも

して夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくのゝしりて、足を空にまどふが曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。

かくて、明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍しき心地ぞする。大路の樣、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

（徒然草）

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる。

桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖。

關白藤原道長。

九　荒れたる御堂

兼好法師

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住處は人改りぬ。桃李ものいはねば、誰と共にか昔を語らん。まして見ぬ古のやむごとなかりけん跡のみぞいと果敢なき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志留り事變じにける樣はあはれなれ。御堂殿の造り磨かせたまひて、莊園多く寄せられ、「わが御族のみ、帝の御後見、世のかためにて行末まで。」とおぼし置きし時、いかならん世にも

かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の頃、南門は燒けぬ。金堂はその後、倒れふしたるまゝにて取立つるわざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとて殘りたる。丈六の佛九體いと尊くて竝びおはします。行成大納言の額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだあるめり。これもまたいつまでかあらん。かばかりの名殘だになき處には、おのづから礎ばかり遺りたるもあれど、定かに知れる人もなし。されば萬づに見ざらん世までを

(一) 阿彌陀堂ともいふ、法成寺の境内にあり。
(二) 藤原行成。三蹟の一人。
(三) 大和守藤原兼行。畫を善くす。

思ひおきてんこそ果敢なかるべけれ。（徒然草）

一〇 にんわじ の ほつし

けんかう ほつし

にんわじ に ある ほつし としよる まで いはしみづを をがまざりければ、こゝろうく おぼえて、ある ときおもひたちて、たゞ ひとり かち より まうでけり。ごくらくじ・からら などを をがみて、かばかり と こゝろえて かへりにけり。さて かたへ の ひと に あひて、「としごろ おもひつる こと はたしはべりぬ。きゝしにもすぎて たふとく こそ おはしけれ。そも まゐり たる

ひと ごと に やま へ のぼりし は なにごと か あり」
けん、ゆかしかりしかど、かみ へ まゐる こそ ほい
なれ と おもひて、やま まで は みず。」と ぞ いひ」
ける。
すこし の こと にも せんだち は あらまほしき こ」
と なり。（つれ〴〵ぐさ）

一一 これも

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名殘とて、各あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあ

浮田一蕙筆（國華）

まり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて、舞ひいでたるに、滿座興に入ることかぎりなし。

暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴事さめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに

腫れて、息もつまりければ打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へ難かりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師のがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見る事限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引きたまへ。」とて、稾のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てゝ首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。辛き命まうけて、久しく病み居たりけり。（徒然草）

一二　汽車に乗りて

上田　敏

赤松の林をあとに、
麻畠ひだりに見つゝ、

汽車はいま隄にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、
河淀の近きはしるし。
三稜草生ふる河原に、
葦切はけゝしと噪ぎ、
鵠こそ夏は來らね、
たま〳〵に百舌の速贄、
箆鷺は何をか思ふ、
しよんぼりと畷に立てり。

紡績の宿にやあらん、
きり、はたり、はたり、ちやうく、
杼の音へだたりゆけば、
道祖神まつるあたりか、
鐵道の蹈切近く、
繩帶の襤褸のころも、
かち色は飾磨の染か、
乳呑子を負へる少女は、
淺茅生の末黑に立ちて、

「萬歳」と囃し送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、
幾年を生きよ、里の子。
人の世に尊きものは、
土の香よ、國の御魂よ。
僞の市にすまへば、
産土の神に離りて、
養をかきたる人も、
埴安の郷のつちより、

生えぬきのなれに呼ばれて、
本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、
農人の寢覺に通ふ、
微かなる土のおとづれ、
なつかしき母の聲あり。
晝さがり草の香高く、
松脂のにほひまじりて、
地の胸の乳房に溢る。

蘇門答剌の香も及ばじ。

忽ちに鐵のにほひす、
鳴神の落ちかゝるごと、
汽車はいま橋に轟く。
桁構眼路をかぎりて、
ひとり見る蛇籠の礫。（あやめ草）

三宅雪嶺

一三　靜思と活動

煩悶の靜思に於ける、猶狂奔の活動に於けるが如し。

共に人生に闘くべからざる所に出で、而して其の餘弊を承けたるなり。靜思は甚だ善し、活動も甚だ善し。而も煩悶と狂奔とは大いに心せざるべからず。煩悶する者は室内に閉居して物思に日を過す。活動する者より觀れば如何にも意氣地なく考へらるべし。狂奔する者は日夕屋外に營々たり。靜思する者より觀れば如何にも無意義に考へらるべし。而も煩悶も靜思として稱すべく、狂奔も活動として稱すべし。物は一槩に判定すべからず。害よりせば則ち害あり、利よりせば則ち利あり。

室内に閉居して物思に耽れば、とかく病的に化し易し。「*小人閒居して不善をなす」と。小人の閒居するは危險なること勿論なるが、小人ならざる者の閒居するも亦決して安全にはあらず。されど閒居することは必ずしも不可ならず。人は靜思して自覺し、自己の過を悟り、又人生に妙趣あるを覺ゆ。而も單に靜思するのみにては足らず。靜思に偏すれば往往徒らに惑ひて歸著する所を知らざらんとす。此等の人々は勉めて外に出でて活動せざるべからず。屋外に奔走する者は、動もすれば百方身の利を謀り、

*小人閒居爲不善、無所不至。

他を排擠して自らの地位を高め、他を陷れて其の財を攫まんとし、弱肉强食を實行して得々たらんとす。勿論人の生存する所以、社會の成立する所以は、實に人の活動して已まざる所に存し、奮鬪は眞に闕くべからず。否奮鬪なければ進歩發達なく、社會は停滯し、人口は減少せん。而も唯此の如くば人生は餘りに殺風景なり。人口のみ增殖したりとて何の益かあらん。かく狂奔する者は時に靜思して自ら省み、生を考へ、死を考へ、以て生活に趣味あらしむべし。靜思する者と活動する者とは、互に長所を交換すべ

し。世に煩悶する者、若しくは煩悶せんとする者あらば、成るべく外に出でて活動せしむるやう仕向くべし。慰藉と稱して或議論を試むるは、卻つて煩悶を長ぜしむる恐あり。屋外に事に從ひて、煩悶する遑なからしむるに若かず、或は又私利を謀りて東奔西走する者あらば、成るべく誘ひて靜思せしむべし。幾許か靜坐して書を讀めば、奪うて飽かざるの甚だしきに至らじ。もと身と心とは相離るべからざるもの、而して動もすれば一方に偏し易し。偏するが故に弊を生ず。宜しく力の限り調和を得しむるに務むべし。

靜思は煩悶とならざるやうにせよ。靜思を靜思たらしめ、活動を活動たらしむるは、靜思と活動とを適當に交代せしむるにあり。（文章世界）

一四　先進遺響

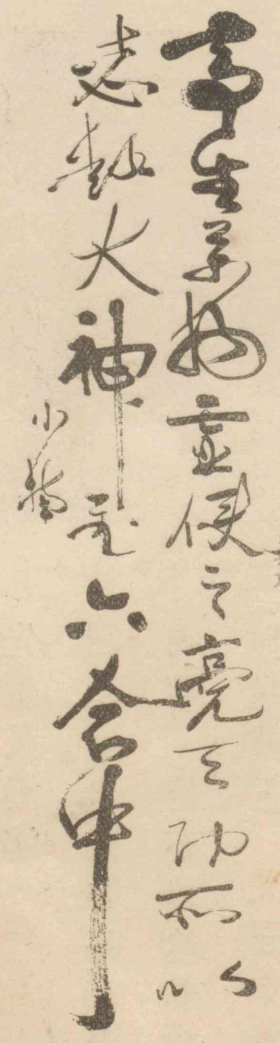
渡邊無邊

南洲先生、居常人を教へて曰く、「人を相手にせず、天を相手にせよ。」又曰く、「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に

困る人ならでは、艱難を俱にして國家の大業は成し得られぬなり」。又曰く、「政の大體は文を興し、武を振ひ、農を勵ます、三つに在り。百般の事は皆此の三つの者を助くる具なり」と。嗚呼此の大道學、大經濟、直ちにこれを實行すれば、其の人は卽ち英雄・豪傑、其の國は則ち富强充實。簡にして盡せりと謂ふべし。

横井小楠（小楠遺稿）

小楠先生偶作の二首あり。曰く、「帝生萬物靈、使之亮天功。所以志趣大、神飛六合中。」又曰く、「道既無形體、心何有拘泥。達人能明了、渾順天地勢。」と。第一首は把捉し來つて好し。以て先生の大節を見るに足る。第二首は放縱し得て妙なり。以て先生の大略を知るべし。



横井小楠筆蹟（小楠遺稿）

象山先生嘗て曰く、「日晷一移、千歲無再來之今、形神既離、萬古無再生之我。」學問事業豈可悠々。」と。以て其の半生の勤敏を見るべし。

佐久間象山及び筆蹟

先生又漫述の二首あり。曰く、「雨風月如晦、頑犬吠成羣。是亦尋常事、利害何足言。」と。又曰く、「謗者任汝謗、嗤者任汝嗤。天公本知我、不覓他人知。」と。以て其の半生の抱負を見るべし。先生は學術・經濟

俱に一世の雄なり。（機外觀）

一五　芳流閣上の奮鬪その一

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾ふ纆の如し。」人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將禍の伏す所、彼にあれば此にありとは思へども、豫でより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかばはるゞ古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は

（一）禍之與福分何異糾纆。
（二）禍兮福之所倚福兮禍之所伏孰知其極。
（三）下總國結城郡。

禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をこゝに釋くよしもなく、縡急にして意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左右に脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして月來獄舍に繫れし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよと

て愁に擇み出されつ。他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たるこゝ生死の海に朝る流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと鼈の樹傳ふごとくさらくと

登りはてたる三層の屋根にはまぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへあうて立つたるありさま、浮圖の上なる鸛の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣・横堀史在村等の老黨・若黨圍繞せし牀几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗・長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外のかなたは、緜連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、「たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど、羅に入りぬ、獸ならねど、狩場に在り。三寸息絶ゆれば、縡みな休まん。脫れ果てじ。」と見えたりけり。

(一) 古河公方足利成氏。
(二) 成氏の老臣。
(三) 墨翟。周の人。
(四) 公輸般。魯の人。

一六　芳流閣上の奮鬪その二

瀧澤馬琴

その時、信乃思ふやう、「初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斫りおとしつる後は絶えて近

づく者なきに、今唯ひとり登りきぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便(一)が虎を暴(アウテ)にする勇あるか、又富田三郎(二)が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇(ヒトツ)の敵なり。ひつ組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん。」と血刀を袴の稜(ソバ)もて推拭ひ、高瀬の如き方桴(コムネ)に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役義に擇み出されしかひもなし。からめとるとも。撃たるとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御諚ざふ。」と呼びかけて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶがごとくに方桴の左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つをはつしと受け留めて、拂へば透かさずこむ刀尖(キツサキ)をさへて流す一上一下、辷る甍を蹈みとめてしきりに進む捕手の祕術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩(カサ)より落す太刀筋をあちこち外す虛々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるもな

(一) 欽明天皇七年百濟に使せしとき虎穴に入りて虎を刺殺す。
(二) 和田義盛の士、源實朝の面前にて長三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折る。

く、またゝきもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやましして刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音、かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕べの虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟の上に死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれ

しかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて礑と打つ十手を丁と受けとむる信乃が刃は鍔際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引著けて、かたみに利腕しかととり、捩ぢ倒さんとえいごゑあはして揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈辷らして河邊の方へころ〳〵と身をころばし

し覆車の米苞阪より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削りなしたる甍の勢、とゞまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へうちかさなりつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきつて射る矢の如き早河の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

一七　佐渡が島

尾崎紅葉

九時三十五分にこゝを發車して、たちまち眼明らかなりと驚けば、渺々たる日本海はをりしも波に一船を著けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虛しく闊きに、たゞ池のごとき潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、瑠璃の煙るやうに物ありて幽かに顯るゝのを、早くも「佐渡々々。」と案内する聲がした。まことに香嶽樓の緣端に伸びあがつて、「わが眉太し。」と天の一方に望んだ佐渡が島は、いま目を遮るものもあらぬ三十海里の波の上に、靜にうかび出たのであ

(一) 明治三十年七月三日。
(二) 越後國春日新田驛。
(三) 越後國赤倉溫泉にあり。
(四) 涼風のわが眉太し佐渡が島。

る。

美なるかな、此の島の風情。凡そ眺めてかくも懷かしく、又況へん方無く心動かさるゝ遠景色は、之を他に求めて、己は有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふに、

佐渡へ〳〵と草木も靡く、

佐渡は居よいか、住みよいか。

とあるのを見ても、此の景に對して心を動かさゞる者は無いと知れる。殊に「居よいか、住みよいか。」と疑つた處に言はれぬ妙が有るので。此の唄の精神も唯其の九字に存すれば、又此の景に人の恍惚たるのも頗る其の九字の感に堪へぬのである。

抑此の海の雄渾と併せて此の島の秀麗を見るのは、北越鐵道線雙快の一つで、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵るまで、米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつつ八門のトンネルを出入するのである。其の趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在つては、全く此の氣魄を闕く。

道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或

は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆ると云ふ有樣。其の大なる者に在つては、百歩にして崕と壅がり、二百歩にして岩鼻と突出るのを、總べてトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

トンネル續きの線路は碓冰であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬは無いが、別してこゝに其の想が有るのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直ち

に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙を去れば丁と、彼等の爭つて五月蠅なすのが一々目に入る。譬へば、己、大剛の者にして、羣がる敵を物の數ともせず、當るを幸、一太刀づつ片端から撫斬にして通るもかくやと覺ゆる樣で、而も處は弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪、韃靼と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたりと思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。こゝを過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つ

ての興となつて、なか〳〵神經などを衰弱させて居る段ではなかつた。（煙霞療養）

一八　唐錦

(一)二二八四―二三四六。

大和國故郷なりければ　下河邊長流

(一)二三〇〇―二三六一。

つひにわゞきてもかへらぬ唐錦、
たゞたゞやゝ何の故郷ゝ山。

春月　釋空也

夕雲雀、芝生におちて聲やめば、
山よりのぼる春ゝ夜ゝ月。

(一)二三三八―二三九六。

書　荷田春滿

ふみわゝを、倭ゝあらぬ唐鳥の
ゝゝを見るゝみ人ゝ道ゝは。

(一)二三五七―二四二九。

嵐　賀茂真淵

信濃ゝる菅ゝ荒野をとぶ鷲の
つゞさもたゞにぬく嵐ゝ哉。

(一)二三九〇―二四六一。

已ゞ像かゝたる上ゝ　本居宣長

ゝきしまの大和心を人とはゞ、
ゝをひゝにほふ山櫻ばな。

淺間山にまを神よりうけたまを

*二四三六―二五〇三。

きる御教ゆ心を　　平田篤胤

なせぞかる、所さねばならず、ふるゆざ狩
からぞやすぼる人ゆはりなさ。

一九　物の初

幸田露伴

よろづのもの、初こそは美はしく面白けれ。混沌わづかに剖れて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう心よかりけん。それは見ねば知らず。まづ年の首の朝ぼらけ、大路に箒目の浪清くして、千門に旗の日の紅飜るすがくしさ。行きかふ人々の面の色も若々しう、悔恨を昨夜の闘の彼方に捨てゝ、希望を此の曉の風の息吹に蘇らせ、今歳はと勇める眼の中の勢もたのもしや。

雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焔旋りて瑪瑙爛る太陽のさし昇りたる、日の出づる初の景色は、春と云はず冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水闊く、暮靄地に這ひて人の語靜まる時、白玉潤を含んで大いなること車輪の如き月の、薄縹の天にそつと出でたる、其の初のすゞしき心地は、之を何にか譬へん。

潮の初も亦面白し。濱の沙固うして礫やゝ乾き、汐木小白みて寄藻香を放つ干潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乘り來り、一分々々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻・汐木のぬれ〳〵て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殼も豔やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃轟轟の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を卷いて、又舒べて、千古萬古人間に其の讀まんことを逼る日日の凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何とも

え云はず壯なり。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初、杉も檜もひよろ〳〵として、松も欅もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悅の目を張りて笑み、風の笞には悲哀の聲を濕ませて戰けど、其の中に不屈の意氣を保ちて、雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして、終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出で

ざるも道こゝに啓かれたりといふべし。

菽の初、菘の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ、伸びんとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微綠柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殼の中にありてひゝと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇ましし。彼の聲には嚶竹裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、

此の姿には鐵翮飈を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。

魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。　仔駒の生れて眼の色さへ定かならぬに、四蹄早くも輕く草の煙を蹴て母馬に追ひつき、其の乳を立飲したる、跡無くして而も至健の德を表す。　獅子の兒の、怒毛もまだ硬からぬに千尺の崖より墜されて、巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒心の遣瀨なき思もすらんを、獸王の血統とて女々しからぬも尊し。

萬の物を觀るに、其の初皆美はしく好し。　人の子の

生るゝや惡相なしと聞く。物皆始有り、願ふ所は其の始有る所以を遂げんことなるのみ。（洗心錄）

二〇　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎賴貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下りたまひしかども、樣々に陳じ申されし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに專ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、*七月十一日にまた六波羅へ召捕られて關東へ送られたまふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所

*元德二年。

なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に蹈みまよふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば、今をかぎりと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。

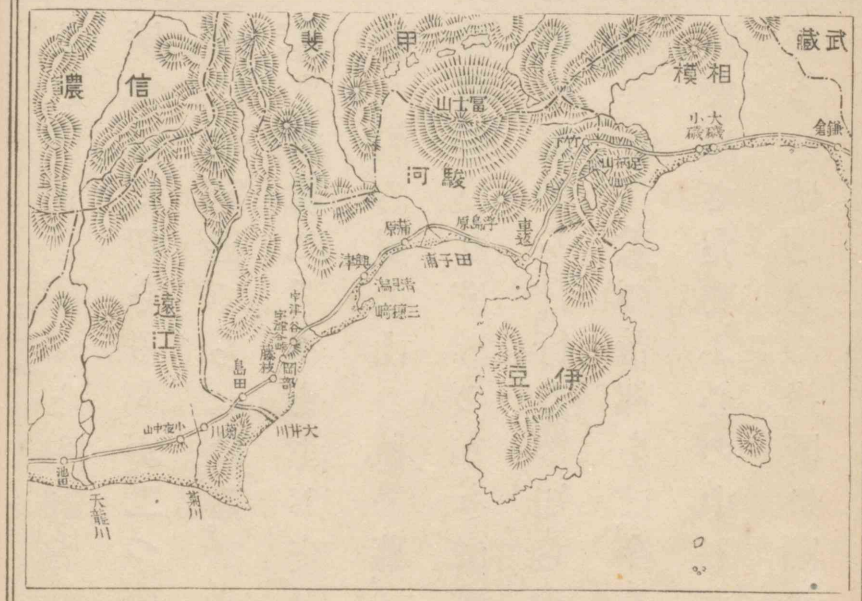
憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖濡れて、末は山

（たや見ん交野のみのの櫻狩花の雪ちる春の曙。）

（朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。）

近江より朝立ちくれば、うねの野にたづぞなくなる明けぬこの夜は。

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。



路を打出の濱。沖をはるかに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろと蹈みならす勢多の長橋打渡り行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもり

山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に駒を留めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

番場・醒ヶ井・柏原、不破の

關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨。いつかわがみのをはりなる熱田の八劔伏し拜み、汐干に今やなるみがた。かたぶく月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづことほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に著きたまふ。

旅館の燈幽かにして鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みて

*小夜千鳥聲こそ近くなるみがたかたむく月にしほやみつらん。

も、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前にかき止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に因りて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡、
今東海道菊川　宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上にな

(一)年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

(二)中納言藤原宗行の誤。

(三)南陽酈縣、有甘谷。谷中水甘美。上有大菊。落水從山流下。得其滋液、谷中人家、飲此水。上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲夭。

り、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも、かゝるためしをきく川の
おなじ流に身をやしづめん。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。　島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うらがれて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。　昔業平の

(一)駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。

(二)富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。

中將の住む處を求むとて、東の方に下るとて、(一)夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎・興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、(二)上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き、船浮きておりたつ田子のみづからも浮世を遶る車返。　竹の下道行き惱む足柄山の嶺より大磯・小磯見おろして

袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著きたまひけれ。（太平記）

二一　松の下露

*元弘元年九月十三日。

*さる程に、類火東西より吹かれて餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め參らせて、宮々卿相雲客みな徒跣なる體にて、何處を指すともなく、足に任せて落ち行きたまふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈

しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第にわかれ〳〵になりて、後には只藤房・季房二人より外は主上の御手を引き參らする人もなし。

(一)不殺生
不偸盗
不邪婬
不妄語
不兩舌
不惡口
不綺語
不慳貪
不瞋恚
不邪見

(二)河内國南河内郡赤阪村大字水分に城址あり。

忝くも十善の天子、玉體を田夫・野人の形に變へさせたまひて、そことも知らず迷ひいでさせたまひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心ちして、一足には休み、二歩には立止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させたまひて寒草のおろ

そかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせたまひて羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多*賀郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。

*山城國綴喜郡。

藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべき心ちせざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に現の夢に臥したまふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召されて、木のかげに立ち寄らせたまひたれば、下露のはらくと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより
あめが下には隱れがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん、頼む陰とて立ちよれば、
なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人、此の邊の案内者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ねいだされたまふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝ら心ある者ならば、天恩を戴

いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、「あはれ此の君を隱し奉つて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄かの事にて綱代の輿だになければ、張輿の怪しげなるに扶け載せ參らせて、まづ南都の內山へ入れ奉る。其の體、只殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。

(一)大和國山邊郡。
(二)夏の桀王、湯を夏臺に囚ふ。夏臺は夏の代の獄の名。
(三)越王勾踐、吳王夫差に破られ會稽山に降る。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞二千餘騎にて路を警固仕りて主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、京に入らずしてすぐに宇治へ參り向うて龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡したまはつて持明院新帝へ參らすべき由を奏聞す。主上藤房を以て仰せ出されけるは「三種の神器は古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありといへども、未だその三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞か

(一)大佛貞金。金澤貞將。
(二)光嚴天皇。

ず。その上、*内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせたまはぬことあらじ。寶劍は武家の輩もし天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させたまはんずるために、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も辭なくして退出す。

翌日龍駕を迴らして六波羅へ成し參らせんとしけ

*八咫鏡。

るを、前々臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、衮衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてそ六波羅へは入らせたまひける。日來の行幸に事かはりて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿・傳馬に扶け載せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせたまへば、見る人、涙を流し、聞く人、心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸、北極の高きに坐して百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋、東夷の卑しきに下らせたまひて萬卒守禦の嚴

しきに御心を惱ましさる。時移り事去り、樂盡きて哀來る、天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢か、とのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出す御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ、
音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに、御文あり。御覽ずれば、

思ひやれ、塵のみつもる四つの緒に
はらひもあへずかゝる涙を。

引返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、
ともにみし夜の影は忘れじ。（太平記）

(一) 諸天命欲レ終時五死相現。一華冠萎。二腋下汗出。三蠅來著レ身。四見三更有レ天坐二己坐處一。五自不レ樂二本座一。

(二) 邯鄲の邸舍にて黄粱を炊ぐ間に盧生が見たる富貴五十年の夢。

(三) 藤原禧子。太政大臣藤原實兼の女。

二二　はぎ

東京府葛飾郡　葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて　朱樂管江

よもぎれと見しは昔の錦にて
ぐもうしはぎぐもりて

早春　四方赤良

生駒の禮者我見れば大道を横ぎりて行くなり

早蕨　言葉

早蕨が拳ぶし我振りあげて　はつ春風をはらふ

言葉　堀河百首　山の横つらはる風ぞふく

郭公に有明の月うちたゝる　藤原定家

郭公鳴きつる方をながむれば　後徳大寺のありあけの顔　言葉

郭公　頭光

*後徳大寺左大臣實定卿の歌に。「郭公鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ殘れる。」

郭公自由自在にまく果は　酒屋へ　三里　豆腐屋へ　二里

絲瓜　木端

世の中は河のへちまと思へども　ぶらりとは暮されもせず

歌人　宿屋飯盛

歌よみは下手なれど天地の　動き出してたまふものは

芳賀矢一

*力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。

二三　祖先崇拜

社會學上から上代のわが國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の情態で、治者は神祇で、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。又一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家であつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。猶太の昔にも行はれたし、其の他原始社會にはいくらも類例のある事である。たゞそれが太古から今日まで持續して來て立憲政治の今日まで殘つて居るといふ事が甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものといつて宜しい。支那の文明を吸收し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で今日までの變遷をなして來たにも拘らず、この太古の政體に伴ふ所のカミ・オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の爭鬪もなく、軋轢もなく、更に西洋の文物制度を入れて立憲政體を爲し得たといふのが面白い所である。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に闊歩して行けるといふのが我

が國民の強みである。

さてこの神祇政治・宗族政治の根本となつて居るものはいふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して之を畏敬し、之を仰慕する念がなければ、もとよりこの樣な政體の成立つわけがない。神話の神々は一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致せられたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素戔嗚神は恐らくは嵐の神であらうが、これと同時に我が民族の中で殊に勝れた尊むべき方々であつたに

相違ない。思兼神や、手力雄命や、天鈿女命や、猿田彦神や皆それ〴〵さういふ方々であつたらうと思はれる。

かういふ祖先の人々を祭つて、お祭をするといふことは、卽ち共同の祖先を崇拜して、そこに一致團結の政治が行はれるといふ事で、これが神祇政治・宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、「之を視ること吾を視るが如くせよ。」と仰せられたのは、卽ち祖先崇拜といふことを明らかにせられたのである。卽ち三種の神器を受傳へになつた御方が、祖先の正統、政治上の元首で、いはゆるカ

ミで、かつオホヤケなのである。それであるから皇位の繼承には三種の神器が最も大事なものになつて居るのである。北畠親房卿が神皇正統記を書いたのも南朝の天子が正統の天子であることを明らかにする爲である。語を換へていへば、我が國體上からいへば、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那にもあるが、支那の樣な革命の國では、是が國家と結びついては何の意味をもなさぬ。羅馬や希臘にもあつたが、今は跡方がない。日本では昔の神祇政治・宗族政治の政體が今日まで連續して殘つて居るから、宗廟を尊み、之を祭ることは、大昔から今日まで政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御卽位の式に神籬を鳥見山に作つて祖宗をお祭りなされたのは卽ち之が爲である。今日でも毎年一月四日の御政始には、「先奏伊勢神宮之事。」といふ事がある。これは大寶令時代からの定まりである。之を單に昔からの習慣とのみ見るのは閒違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰・講和の詔勅を發し給ふときに大廟にお

告になるのもその意味からである。東郷大將が凱旋して大廟に參詣し、伊藤統監が韓國に赴任するに就いて參宮を果すといふのも、この理由によるのである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、又は歸朝した人などが拜謁と同時に參拜を仰付けられるのもこの政體の上からの意味をもつて居る。「日本は神國なり。」と昔から人のいふのはこれが爲である。神といつても後世に發達した神道各派の神をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の自由といふことには何等の關係がない。苟も

日本の國土に生れて日本國の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對するマゴコロから祖宗の靈を尊ぶといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴つたことである。

朝廷に於て大廟を御崇敬になるばかりでなく、この事は深く國民の間にもしみ渡つて居る。一生の中に一度は大神宮に參らねばならぬとは、如何なる僻地を耕して居る農民でも常に思つて居る事である。拔け參りといつて、殆ど無錢旅行をしてまでも陸續として出かけるのである。各郷各村に神明の社の

あるのも、その御靈を分けたのである。伊勢の大麻は全國の家毎には必ず祭るのである。如何なる佛教のかたまり家でも、お伊勢様は別物として居る、決してその信仰とは衝突せぬ。佛壇のある家にも神棚はある。佛壇の中にも先祖の位牌がある。これは決して神佛混淆の教が行はれた結果と見てはならぬ。いくら佛教に熱心な人でも皇室に對しては忠義心を失はないと同様、大神宮に對しては同じく崇敬の念を失はないのである。

佛教信者の親房卿でも、「日本は神國なり。」といふのである。佛法の說教を主とした様な謠曲にも、「日本は神國なり。」をくりかへすのである。本地垂迹などといふことは佛教者がうまく我が國體を洞察して說出したことで、これでなくては、日本には行はれなかつたのである。猛烈な勢を以て日本を席卷した佛教でも我が國民性を壓服するわけには行かなかつた。やむを得ず調和策を取つたのである。支那で孔子・老子について垂迹說をやつたのとおなじ筆法を以て、我が國の神様をそれに附會したのである。淨土眞宗で、他力の信心を說き、未來の極樂往生を說

きながら、一方にはしきりに王法を守れと說いたのは、よく我が國民性に投じて、眞宗の今日の盛大をなした一原因であらう。「佛は九善、王は十善。」といふことがどこまでも國民の信じて居る金言である。

（國民性十論）

二四　乃木大將を祭る

軍事參議官兼學習院長陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典命・伯爵夫人乃木靜子命二柱の柩の前に、齋主大敎正千家尊弘畏み拜みも白さく。

祭文

今修め奉る祭典はしも汝が命等の御一世の終の大式にしあれば、荒玉の年の緒永く久しく朝廷の御爲に國の爲に立て給ひし大き功の事の蹟と世に立越えたる御行爲の節々とを委曲に誄び稱へまほしくは思ひ奉れど、事長ければ大方は省きて、只その要とある事のみかつ〳〵言擧げ偲び奉らんとす。

あはれ希典卿はしも豐浦*の殿人乃木十郎希次大人の愛子にして、嘉永二年に生れ出で給ひ、又靜子刀自は鹿兒島の殿人湯地定之大人の御女にして、安政六年に生れ出で給ひき。然るに希典卿はや天性嚴く

*長門國豐浦郡長府。

正しく武く雄々しくましく、慶應二年七月の頃より明倫館なる文學寮に入りて學ばし、その後豐浦藩の軍の事に關り勤み給ひ、明治四年に始めて陸軍少佐に任けらえ給ひしが、それより明治四十年に至るまでは一向に大御軍に仕へ奉らし、御一世の高き功もその年月の間にありしが、中にも明治十年筑紫潟荒き浪風立騒ぎし時と、又同じき二十七八年の戰の役とに立て給ひし功も少からぬが、特に同じき三十七八年の戰の役の如きは第三軍司令官として行き向ひ、天下に類なき旅順の要害の地を攻め陷し、それ

より處々に轉り戰ひ、いや大き功を顯はし、美しき名を國の内外に輝かし給ひ、又大御治めも飽かぬ節なく滿ち足らひぬ。かくて明治四十年の一月に畏き先の天皇の深き大御心もて學習院長を兼ねしめ給ひしにより、專ら華族といふ階高き人々の子等の教育の事に御心を盡し給ひてその功も次々に顯はえつゝありしに、先つ頃先の天皇崩御り給ひしを悼み悲しみ奉らしゝ事も又並々ならざりしとぞ聞えたる。然るに如何なる御心構やましくけん、去にし十三日の大御葬の日にして夫婦相共に御親ら燒刄

に伏して身失せ給ひしは、ゆゝしともゆゝしき事の極みになも。かれかくなり果て給ひし事の故由は書き遺し給へる書にもあれど、尚深き御心しらひの事もあるべしとは思ひ量り奉るも、是はし御心に悖る事もやあらんかと畏みて今は白さじ。

あはれ石の上古き大御代より例なき眞盛なる今の大御代は世に立越えたる大き功臣等も少からぬを、別きて古今に類なき武士の益荒武男、萬代の臣の鑑と稱へ奉りて人皆が仰ぎ慕ひし事なるが、これ全くその性の嚴く正しく、その御心の眞澄の鏡の清く美

しく、家をも身をも顧みせず只管に朝廷を尊び國を愛しむ御心厚く、常に謙りて驕る事なく、凡て人の行ひ勤むべき事も言ふは易く行ふは難きを、その易きを論はせず難き勤をなし行ひ給ひ、既に彼の二人の愛子を戰の場に先だたしめ給ひしが、子を思ふ親の情は如何ばかり武く雄々しき御心も尚同じきを、大御軍に仕へ奉る武士の豫ての心しらひ、國に報い奉る公民の本務と聊かも悲しみ歎きまさゞりしをもても、その御心の清く高く、世の人皆がかくばかり尊び仰ぎ奉りしも、げに宜なりとこそいふべけれ。

又靜子刀自は明治十一年に乃木の家に嫁ぎ給ひしが、操正しく、家の内外を治め締り給ひぬれば、夫の君が内を顧みます煩なく賤機帶の只一筋に官に勤しみ大き功勳を立て竟て給ひしも、夫人の君の御心盡に依れる事もなどかなからん。かにもかくにも夫婦相併ばして世の稀人にましくきといふより外に稱へ白さん言の葉ぞなき。

然れば今は只我が皇御國の國の礎、吾が朝廷の大宮柱とも思ひ奉りし將軍及びその夫人君を失ひし事を惜み悲しみ奉ると共に、夫婦かく相雙ばして御身を捨て、遠く遙けき後の世かけて盡きず朽せぬ深き高き教を遺し給ひし事を畏み辱み奉りて拜み仕へ奉る事を相諾ひ聞食して、神靈は永久に國の守護と鎭り給ひ、柩は平けく大地の底深く鎭まりませと、幣帛捧げ奉りて畏み拜みも白す。

二五　東郷大將を論ず

尾崎行雄

古來の英雄何ぞ限らん。若しそれ細觀詳察して其の性行を彙類する時は、千態萬狀筆紙の能く盡す所にあらざるべし。然れども試に大別して二種とす

ることを得。一は卽ちはでなるものにして、他は卽ちぢみなるものなり。

所謂はでなるものとは、力めて顯彰若くは誇揚せんとし、然らずとも時に應じ機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者を指す。而して此の中又分ちて三樣の類を品することを得。彼の好んで自己の功業を語り、勳績を述べ、舉止鷹揚、眼中人無きが如き者は第一類に屬す。或は恭謙士に下り、時に喜んで施與し、故らに弊衣を纏ふが如きは全く第一類と其の途を異にすれども、深く心裏に入りて剖析するときは、其の自己を顯彰若くは誇揚せんとするに於て些の異なる所を見ず。唯手段方法に積極と消極との差あるのみ。之を第二類とす。故らに斯る手段方法を取らざれども、時に應じ機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者は蓋し第三類か。

一舉一動他人の視聽を惹き、延いては則ち一代の聲譽となり、流れては則ち後世の史乘となる。光芒陸離、才華爛漫、世間凡庸の徒をして跪拜して近づく能はざるが如き感を懷かしむるものは、所謂はでなる英雄の事なり。但しぢみなる英雄に至りては多く

之に反す。

所謂ぢみなる英雄は、力めて自己を顯彰若くは誇揚するに意なきは勿論、如何なる時に際しても、胸中の英氣を發することなし。是の故に凡庸者流或は看て以て無能となす。唯事業の大局を達觀し、性行の全體を通覽する者にして、始めて異常傑出の人たるを解す。乃ちぢみなる英雄の本色は、些の衒氣なく、矯飾なきは言ふを待たず。寧ろ自ら異常傑出の人たるを悟らざる底の所に在り。

之を名畫に譬へんか。はでなるものは猶密畫のごとくぢみなるものは猶疏畫のごとし。樹枝草葉の微に及ぶまで曲に描寫の妙を極むるは密畫の名手なり。兒童走卒といへども亦時に其の美を解することを得。疏畫の鉅匠に至つては筆を用ふる事少く、逸氣風神唯其の一點一畫の上に流動す。畫に老けたる者にあらずんば決して其の妙を認識することと能はざるなり。

形迹は倣ふべくして風神は模し難し。是密畫に僞作多くして、疏畫に贋物少き所以か。世の小才を抱き、奸智を用ふる徒が、動もすればはでなる英雄を擬

して當面を彌縫するを得るも、畢にぢみなる英雄を學ぶ能はざるは亦宜ならずや。

今や東郷大將の大名は赫灼として五洲の外を燭せり。然れども其の一言一行の上に於て果して特異なる點あるか。謦欬に接する者は唯其の溫厚謙虛にして多く語らざるを見るのみ。功績を觀る者は唯其の露國の太平洋艦隊・波羅的艦隊を殲滅したるを知るのみ。筆を操つて言行の細を傳へんとする者が其の材料の匱乏に困しむ看ある、良に以ありと謂ふべし。

多く語らずといへども、十萬の貔貅は其の一令に聽いて生命を鴻毛の輕きに比し、言行の特筆すべきものなしといへども、赫灼たる大名は遠く五洲の外を燭す。我是に於てか所謂ぢみなる英雄の實際を目前に睹ることを得たり。

聞く、東郷氏西郷南洲と鄕曲を同じうし、少時其の門に出入して屢其の敎を受けたりと。蓋し深く私淑する所ありて然るか。余の氏に於ける一二回の面識に過ぎず、豈善く其の性行を識ると謂はんや。但し氏に敬服するは、氏が蓋世の偉功を奏しながら毫

も之を自覺せざるものゝ如くなるにあり。王莽の恭謙は以て愚夫愚婦を欺くべし、以て識者を欺くべからず。東郷氏の鞠躬如たるは作意の恭謙に非ずして自ら其の功業の偉大なるを知らざるが爲なるに似たり。蓋世の偉功は悉く是部下將卒盡瘁の結果にして、我が智謀の結果に非ずと確信するが爲なるに似たり。功は則ち人に讓り、過は則ち自ら居るといふに非ずして、自身其の動功を覺知せず、獨り部下將卒の勳勞を思念するが爲なるに似たり。天地を震撼する萬歲聲裏に驩迎せらるゝに當つて、まづ

*入公門鞠躬如也。如不容。

氏の胸中に浮ぶは配下の死傷者なるべし。唯夫此の心あり、以て十萬貔貅の死力を收むるを得べし。曠古の偉勳を奏して之を自覺せず。是東郷氏の東郷氏たる所以にして、所謂ぢみなる英雄の最上乘なるものにあらずや。（愕堂集）

師範學校 國文教科書 本科用 卷三 終

文部省檢定濟

大正五年一月十二日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十二年二月廿八日訂正十二版印刷
明治四十二年三月三日訂正十三版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正五年一月十日修正十六版發行
明治四十四年十二月十三日訂正十三版印刷
明治四十四年十二月十六日訂正十三版發行
明治四十五年二月九日訂正十四版印刷
大正四年十月廿七日修正十五版印刷
大正四年十月三十日修正十五版發行

定價金二拾八錢
大正六年度臨時定價金三拾錢

編者 東京市小石川區高田老松町五十二番地 吉田彌平

發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一郎

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店 (電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番)

印刷者 東京市神田區裏神保町六番地 四海民藏

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

東京秀英舍第一工場印刷